

平成 22 年 12 月

新米を噛み百姓のプロの顔
オルガンも音痴となりぬ文化の日
自己主張せねば目立たず高音鴟
訃報受く受話器持つ手の悴める
亡骸に夜を徹して冬灯
冬空へ出棺の窓開け放つ
小春日の空に広がり母焼く煙
大往生と吾を慰め冬の寺
遺影の母を残して冬の汽車に乗る
放哉のごとく孤独に咳込める
人生が二度あるならば返り花
白鳥は哀しいなんて言はないよ
鷹の目の澄んで孤高を保ちけり
街角やミニはミニでもシクラメン
枯葉たち風に急かされ吹き溜まる
デビューともリハーサルとも笹鳴は
樹の上の梟置物のふりをして
神無月駐在さんも留守がちで

マフラーの片端ひだり肩にのる
黄色いボタンいくつもつけて蜜柑山
ばらばらに舞つて一群綿虫は
煮めたる色よおでんの串もまた
木々の直立木枯らしの訪問に
炉開きといふ火遊びの一種かな